

2010年6月15日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520385  
 研究課題名（和文）方言調査法の検討を目的とした福島県方言の調査研究  
 研究課題名（英文）Surveillance study on dialects of Fukushima Prefecture to examine dialect investigation method  
 研究代表者 半沢 康(HANZAWA YASUSI)  
 福島大学・人間発達文化学類・准教授  
 研究者番号：10254822

研究成果の概要(和文):15年前「有意抽出によって選出されたインフォーマント」を対象に「面接質問法」によって方言調査を実施した福島県南相馬市小高区において、同様の方法で追跡調査を実施し、実時間上の方言変化の様相を把握するとともに、その調査方法の妥当性を検討した。2回の調査結果は、項目によって若干のずれは示しつつも、全体としてはかなり一致した。有意抽出によってインフォーマントを選出しており、かつ各コーホートの人数が十分に多いとも言えないが、にもかかわらず2回の独立の調査結果に一致が見られたということは、それぞれの調査が各コーホートの方言状況を一定適切にとらえており、こうした調査方法の有効性を示唆するものと考えられよう。なお、同一の調査法を用い、複数調査を繰り返す実時間調査において確認される調査結果の異なりが真に経年変化によるものであることを述べるためには、用いた調査法が「同一人物に同一の方法で調査を行った場合には、同一の調査結果が得られる」ものであること、すなわち、方言調査法が十分な「信頼性」を有する(インフォーマントの方言実態を安定的に測定しうる)ことが前提となる。この点を検討するための調査も実施した。このデータについては現在分析を進めているところであり、今後結果を公表する予定である。

研究成果の概要(英文): The Real-Time Survey of Dialects was executed in Odaka district of Minami-Soma city, Fukushima Prefecture. The dialect change of 15 years was observed. The validity of the survey method was examined. The reliability of the survey data was examined. The analysis result will be made public in the future.

交付決定額  
 (金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：国語学  
 科研費の分科・細目：言語学・日本語学  
 キーワード：南相馬市小高区，実時間調査

#### 1. 研究開始当初の背景

方言調査は方言研究の基礎となるデータを収集するものである。調査データがインフォーマントの方言実態を正確に反映したものでなければ、その後の分析が意義を失うことは明らかであろう。調査を研究の主要な方法とする研究分野において、調査法自体の科学的な評価は不可欠の課題であり、心理学、社会

学、行動科学などの研究領域では調査方法の妥当性と信頼性を事前に検討することが当然とされる。調査法自体の検討を目的とした実験的な調査も盛んであり、調査結果の信頼性を検討した論考も各種発表されている(鈴木達三1968「面接調査における回答の安定性について」、『統計数理研究所集報』16, 北田淳子2008「意識調査における回答変動の検討 実質的变化と回答のゆれの分離」)

『行動計量学』35-2など)。

これに対し、同じく調査を研究の重要な方法とする方言研究領域を省みるに、このように実証データを用いた調査法自体の検討は不十分な状態にあるとあってよい。通信調査と面接調査の結果の異同を分析した研究(小林隆 1988「通信調査法の再評価」『方言研究法の探索』)や、質問法や対象とするインフォーマント、地点等の条件を変えて『日本語地図』の調査結果を検証する試み(国立国語研究所1985『方言の諸相』)などは見られるものの、上記のように、そもそも方言調査で用いられるさまざまな調査方法が、どの程度の誤差を含んで方言実態を測定しているのかという科学的な検証は行なわれていない。また日本の(社会言語学的)方言調査では、公的機関や知人の紹介によってインフォーマントに協力を依頼する有意抽出法が多く用いられている。有意抽出法では、方言に好意的なインフォーマントや、一定以上の学歴、階層のインフォーマントが多く選出される可能性が否定できないため、当該地域の方言の一般的な傾向を捉えるには、ランダムサンプリングによってインフォーマントを選出すべきである。しかしながら一方で、言語が意思疎通のツールである以上(たとえば同一世代間では)ある程度の等質性が保証されること、ランダムサンプリングを実施するコストに見合う成果が得られるか不明であることなどを理由に、有意抽出法によっても一定の傾向性を捉えることができるといった考え方もある。こうした議論の妥当性は具体的なデータに基づいて検討されなければならないのだが、この問題を検証しうるデータセットの蓄積はこれまでには行われて来なかった。

## 2. 研究の目的

本研究では社会言語学的方言調査における調査法について検討を行い、その妥当性・信頼性を検討する。またそのための調査を15年前に社会言語学的多人数調査が実施された地域において実施し、方言の実時間変化データを蓄積する。

## 3. 研究の方法

1992-94年にかけて、福島県相馬郡小高町、原町市を対象とした多人数方言調査を実施し、当該地域の方言変容・共通語化の様相を把握した。この調査を「第1次調査」と呼ぶ。

調査の企画・実施主体は東北大学国語学研究室である。1993、94年は科学研究費の助成を受けている。

小高町の調査は1992、93年に実施。町内に住む各年代のインフォーマント計104名の協力を得た。インフォーマントの選出は有意抽出による。実査では質問紙を用いた面接調査を行い、音声、アクセント、語彙、文法に関

するデータを得た。調査結果は原則としてアナログカセットテープに録音した。また、面接調査終了後に自記式質問紙調査票を配布してインフォーマントの方言・地域意識を把握した。

この第1次調査からおおよそ15年後に、南相馬市小高区(旧小高町)を対象とした経年調査を実施した。これを第2次調査とする。

第1次調査参加者を中心とした研究メンバーを組織。まず東北大学より第1次調査の調査票、テープを借り受け、前回の調査の際に作成した電子データを再整理するとともに、録音を聞きなおすなどしてデータクリーニングを行なった。

2006年に準備調査に着手し、2009年に全調査が終了した。

インフォーマントの選出は第1次調査に準じて有意抽出によった。研究協力者が中心となり、南相馬市教育委員会の協力を得て行なった。また第1次調査のインフォーマント中、追跡調査が可能な方へ再調査を依頼し、18名から再び協力をいただいた。第1次調査と同様、面接調査と自記式質問紙調査を併用した。インフォーマントの内訳は以下の通り。

	第1次調査			第2次調査		
	女性	男性	計	女性	男性	計
世代						
高年層[60歳- ]	8	10	18	17	18	35
中年層[40-59歳]	10	13	23	13	13	26
若年層[19-39歳]	13	11	24	14	14	28
少年層[ -18歳]	15	14	29	9	10	19
生年						
-1915年	1	1	2	-	-	-
1916-30年	4	9	13	3	2	5
1931-45年	6	5	11	9	10	19
1946-60年	13	11	24	14	12	26
1961-75年	7	8	15	8	12	20
1976-90年	15	14	29	10	9	19
1991年-	-	-	-	9	10	19
合計	46	48	94	53	55	108

調査は研究代表者、分担者(連携研究者)、協力者が担当した。

## 4. 研究成果

研究成果は科学研究費報告書『福島県南相馬市小高区における方言の実時間調査報告』を刊行、公開した。詳細はそちらに譲る。

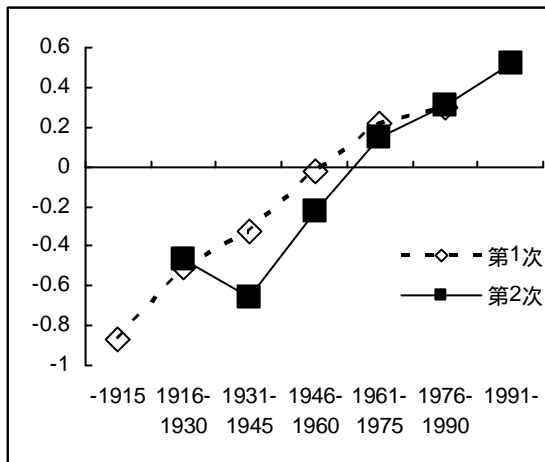
南相馬市小高区方言の実時間変化については、2回の調査データに数量化 類を適用し、結果の総合を試みた。第2次調査で質問法を変更した項目を除く17項目について家族場面、テレビ場面で回答された各語形を変数(言う・言わないの2値データ)とし、第1次、第2次のインフォーマント計202名分をまとめて分析した。

1軸の相関係数は0.468。マイナスからプラ

スに向かって、変数がほぼ「テレビ場面・方言形使用」「家族場面・方言形使用」「テレビ場面・共通語形使用」「家族場面・共通語形使用」の順に並んでいる。「共通語化」を反映する軸とみなすことができる(下表)。

語形	1軸	2軸	度数	語形	1軸	2軸	度数
シガ[TV]	-4.748	6.073	10	オキッペ	-0.148	-0.571	148
アクト[TV]	-4.703	7.916	3	オキラレナイ[TV]	0.011	-1.264	98
マナク[TV]	-4.506	5.028	4	ケレドモ[TV]	0.025	-1.182	93
シタキ[TV]	-4.164	6.009	9	メ[TV]	0.093	0.077	180
カカイル[TV]	-3.648	3.992	10	カカト[TV]	0.101	0.063	180
オキランニエ[TV]	-3.594	6.752	14	カカト	0.109	0.071	180
コーノケ[TV]	-3.454	3.181	17	ツバ[TV]	0.126	-0.282	151
ゲンチョモ[TV]	-3.338	5.406	16	カエル[TV]	0.180	-0.033	179
ライサマ[TV]	-3.198	4.559	18	スエッコ[TV]	0.209	-0.326	152
あの人ダゴンチャ	-3.125	1.539	3	カクコンマ[TV]	0.212	2.888	3
オタマンコ[TV]	-3.058	4.284	9	メ	0.289	0.186	170
あの人ダラ[TV]	-2.872	2.449	18	ツララ[TV]	0.323	-0.273	171
アクト	-2.709	0.214	23	カミナリ[TV]	0.332	-0.154	170
シガ	-2.536	-0.856	46	カケル[TV]	0.349	0.295	137
ゲントモ[TV]	-2.379	-0.139	11	オタマジャクシ	0.356	0.261	165
ガエル[TV]	-2.212	3.126	10	あの人ナラ[TV]	0.365	-0.228	167
カクンダラ[TV]	-2.041	1.603	21	マユゲ[TV]	0.410	-0.241	169
シタキ	-1.987	-1.294	64	カクナラ[TV]	0.456	0.114	142
コーノケ	-1.979	-0.958	65	ツバ	0.502	0.293	152
バッチャ[TV]	-1.954	2.785	26	カタグルマ[TV]	0.521	-0.045	145
マナク	-1.948	-0.934	57	オキランネ	0.527	-1.762	16
カクベ[TV]	-1.834	2.883	20	カクダロー[TV]	0.551	-0.509	112
オキッペ[TV]	-1.762	2.578	19	カエル	0.555	0.307	154
クビコンマ[TV]	-1.621	-0.014	43	ツララ	0.561	0.115	155
オタマンコ	-1.594	-1.371	54	オキヨー[TV]	0.620	-0.543	113
カカイル	-1.544	-0.492	65	マユゲ	0.637	0.261	153
ガエル	-1.506	-0.917	80	ケレドモ	0.683	-0.153	25
カクゴンチャ[TV]	-1.428	-0.823	4	あの人ナラ	0.697	0.222	144
カクゴンチャ	-1.356	-1.652	42	スエッコ	0.728	0.830	101
あの人ダラ	-1.295	-1.167	82	カミナリ	0.844	0.359	134
オキランネ[TV]	-1.197	-2.566	4	カタグルマ	0.894	0.378	123
ゲンチョモ	-1.092	-0.768	94	カケル	0.904	0.734	115
バッチャ	-0.973	-0.866	111	オキラレナイ[TV]	0.911	0.709	69
クビコンマ	-0.967	-0.824	103	カクナラ	0.918	0.668	120
カカレル[TV]	-0.932	-2.113	36	ケド[TV]	1.116	0.550	74
カクンダラ	-0.922	-0.964	78	オキラレナイ	1.276	0.611	28
ライサマ	-0.848	-0.645	122	カクダロー	1.429	1.123	53
ゲントモ	-0.571	-1.506	44	オキラレナイ	1.896	1.901	54
オキランニエ	-0.565	-0.403	131	オキヨー	1.963	2.076	36
カクベ	-0.494	-0.701	133	ケド	2.044	2.143	57
ゲルッコ	-0.479	-2.553	5				
カタコンマ	-0.361	0.692	8				
				相関係数	.468	.286	

南相馬市小高区(旧小高町)における2回の第1次調査,第2次調査のインフォーマントそれぞれについて,コーホートごとに1軸のサンプルスコアの平均値を求めた(下図)。1931-1945年生まれ世代,1946-1960年生まれ世代(2009年末78-49歳)でスコアが下がる(方言化が進行する)傾向が見られるものの,全体の結果は比較的よく一致した。



経年調査の結果をコーホート比較し,当該地域の実時間上の変化を見たところ,項目によって若干のずれは示しつつも,全体として2回のグラフはかなり一致し,第2次調査で新たに加わった平成生まれ世代の数値がその延長上に位置している。第1次調査において行なった年齢差(見かけ時間)による分析の妥当性が確認できよう。

有意抽出によってインフォーマントを選出しており,かつ各コーホートの人数が十分に多いとも言えないが,にもかかわらず2回の独立の調査結果に一致が見られたということは,それぞれの調査が各コーホートの方言状況を一定適切にとらえていた蓋然性を示唆するものといえようか。南相馬市小高区は人口1万人程度の地域であり,都市に比べれば構成員の等質性が高く,同一コーホート内の分散が小さいのかもしれない。また小高区出身・成育者(小高区方言ネイティブ)のみを対象としたことで,人口移動や住民構成の変化などの影響を排除できたという側面もあるだろう。

もちろん項目によっては2回の調査結果が一致しないもの,特に15年間で同一コーホートの使用率が上昇したのものもある。それが上記のようなインフォーマント選出方法に起因する調査誤差なのか,あるいはなんらかの要因による言語変化を反映したもののなのかについては今後さらに検討していくこととする。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

半沢康「南相馬市小高区方言の変容—方言実時間調査データの比較—」,『言文』57,査読無,2010.3,pp.2-14

本多真史「福島県南相馬市小高区における方言使用実態 - 世代差に着目して - 」,『言文』57,査読無,2010.3,pp.15-25

〔学会発表〕(計2件)

半沢康「方言伝播の東西差」(2007.12,福島大学国語教育文化学会2007年後期学会,福島大学)

半沢康「福島県方言の動態 - 八の終助詞化 - 」(2009.5,福島大学国語教育文化学会2009年5月学会,福島大学)

〔図書〕(計1件)

半沢康編『福島県南相馬市小高区における方言の実時間調査報告』2010.3,科研費報告書,pp.76

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)  
取得状況(計0件)

〔その他〕  
ホームページ等  
<http://www2.educ.fukushima-u.ac.jp/~yhanzawa/>

#### 6．研究組織

(1)研究代表者  
半沢康(HANZAWA YASUSI)  
福島大学・人間発達文化学類・准教授  
研究者番号：10254822

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
武田拓(TAKEDA TAKU)  
仙台高等専門学校・総合科学系・准教授  
研究者番号：20290695

齋藤孝滋(SAITO KOZI)  
フェリス学院大学・文学部・教授  
研究者番号：50241500